



貫通を祝って万歳  
神主山トンネル内部



## 難工事を克服

# 神主山トンネルが貫通

昭和五十三年七月から掘削工事を開始していた神主山トンネルが、四月二十五日に貫通し、午前十一時から市長はじめ日本道路公団や工事関係者約百名が参加して、盛大に貫通式が行われました。

神主山トンネルの掘削は、上部半断面先進工法によって進められ、日光I・C寄りから四百メートル付近までは順調に進行しましたが、それからは岩盤のもろさから工事が難行していました。

このトンネルは、全長九百八メ

ートル、幅員八・五メートルの二車線の道路で、消火栓、火災通報器、非常電話、待避所などの防災設備を設置し、事故防止に万全を期しています。

日光I・Cから清滝I・Cまで

の全線六キロメートルが開通するのは五十七年三月の予定になっていますが、これが完成しますところの区間を六分で走行でき、行楽シーズンの車の渋滞緩和に大いに役立つものと期待されています。

### 東武日光駅に

## 新しい市民憲章板

「旅行者を温かく迎えますよう」おなじみの市民憲章板が、日光の玄関口東武駅前に設置されました。この市民憲章板は、昨年、東武

駅が全面改築されたためにつくられたもので、タテ九十センチメートル、ヨコ百三十七センチメートルのアルミ製の立派なものです。



新しい市民憲章板

されたもの。他に廻廊の外壁にある十二基の燭台が、蓮灯籠とともに献上されている。

関が原の戦で、家康公が実質的天下統一を成し遂げた慶長五年（一六〇〇）三月、オランダ船リーフデ号が豊後の臼杵に漂着、同船に乗り組んでいたヤン・ヨーステンや英国人航海士ウィリアム・アダムス（三浦安針、後に家康公の外交顧問）らの帰化活動に始る日本とオランダの関係は、慶長十四年（一六〇九）平戸にオランダ商館が設置され、交易が開始されるとともに深まり、鎖国中もオランダのみ例外として交易が行なわれてきた。前記洋風灯籠は、そうした関係にあったオランダから当時献上されたもので、三百余年にわたる同国の友好の記念であり、当時の西歐文化の遺品として、きわめて貴重なものである。

四月二十四日、三百年余の眠りを破って、これらの燭台に灯がともされた。予定されたクラーウ・オランダ外相夫妻が都合で来日できないため、特使のホイテインク外務省アジア・オセアニア局長により、オランダ製のロソクで、全部の灯籠に火がともされた。同日は、夜にも点火が再現され、三百年余の友好をあたため合った。